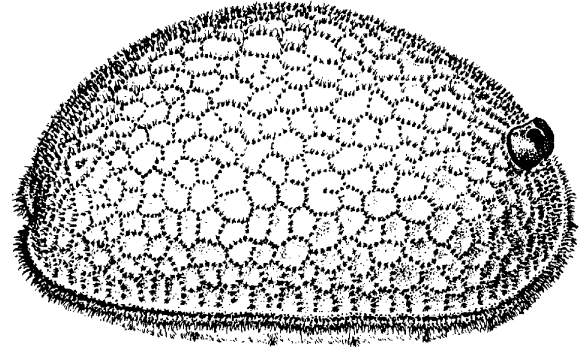




## アリの巣にアブがいる!?!~新種のアブ~

緑もまぶしい初夏、定山溪など札幌市周辺の森ではなんとも風変わりな虫が現れます。ずんぐりしたアブともハエともつかない生き物で、胸は鮮やかなだいたい色の毛に覆われています。林道の脇を地面すれすれに飛ぶ姿は光の玉が舞っているようで、蜜や花粉を求めて花を訪れるマルハナバチにも似ています。ちょっと違うのはその花に全く興味がない点。この虫はニシキアリノスアブという名前で、札幌市内などから採集された標本にもとづき、去年新種として名前がつけられたばかりです。

「アリの巣」と「アブ」、すぐに結びつくとは思えない変な組み合わせですが、名前が示すように、このなかまの幼虫はアリの巣で育つと考えられています。その姿はいったい何の虫だろうと思うようなドーム型をした生き物で（図参照）、昔の学者にはナメクジの新種として名前をつけた人もいたそうです。また、アブとはいっても家畜や人を刺すアブとは違



*Microdon ruficrus*

図（参考）アメリカ産のアリノスアブの幼虫  
(Vockeroth, J. R. and F. C. Thompson. 1987)

い、花に集まって蜜や花粉を食べるハナアブ科に含まれるハエやアブのなかまにあたる昆虫です。ただし、この仲間については成虫が何を食べているのか分かっていません。ちゃんと口はあるのですが、ほかのハナアブのように花を訪れることはないようです。もしかしたら成虫は何も食わず、せいぜい水をなめる程度かもしれません。

ニシキアリノスアブは6月中旬から7月はじめにクロヤマアリの大きな巣の回りに集まっていますが、それからあとは全く姿が見えなくなります。成虫は1.5cmほどもあり、ハエやアブのなかまでは大きいほうですが、このように活動期間が短いため、これまであまり人の目に触れることがなかったのでしょう。また、幼虫もこのアリの巣に住んでいるはずですが、今のところ発見されていません。札幌市内にはこのほかに4種のアリノスアブが住んでいます。実はこのうち2種もニシキアリノスアブと同時に名前がつけられた新種でした。札幌周辺の森でアリと共にひっそり生きてきたこの虫たちはやっと名前がついたばかりで、未だ多くの謎を秘めたままです。（広永輝彦：北海道大学大学院農学研究科昆虫体系学講座研究生）



札幌湖、付近の標本が基準となった新種「ニシキアリノスアブ」。

～大平原の小さな博物館～

カナダ・アルバータ “ハイウェイ3号線” から

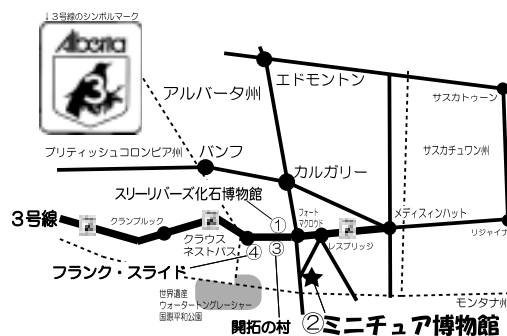
北川 芳 男(理学博士、元北海道開拓記念館学芸部長)

② カードストーンのミニチュア博物館

ハイウェイ3号線の中心都市レスブリッジで南西方向に走る5号線に入り、一路、カードストーンを目指す。途中、マグレイスなどの集落を過ぎた辺りから、遠く西方に南部カナディアンロッキーの山並みが見えてきた。車の往来はほとんど無く、車を飛ばしてカードストーンの町に入り、ここで、アルバータを南北に縦断する大動脈ハイウェイ2号線と合流した。

信号待ちの間に「Museum of Miniatures」と書かれた案内板が目に入った。「ちょっと、寄ってみようか」と、右折すると、二階建てで切妻造りの建物があり、それがミニチュア博物館であった。中に入ってカウンターいた年配の男性に挨拶の声をかけると、博物館の内容をいろいろ話し始めた。実は、この男性がこの博物館の主人だった。その間も目に入る精巧なミニチュア展示に「すごいな！」と思わず声がでた。

このミニチュア展示のおもしろさとすばらしさは、百数十年前の西部開拓時代に焦点を絞り、当時の自然と人々の生活文化を約10分の1サイズで再現しているところである。それらは、先住民のテント村と幌馬車隊、その背景のバッファローの群れや、多くの野生動物がいる森林、にぎわう先住民との交易所、そして、活力に満ちた西部の町の風景である。



復元された開拓期の街並み。人物は7～10cmの背丈です。そこには、生活には欠かせない馬の厩舎や蹄鉄屋、学校、教会、各種の商店、ホテル、等々が建ち並び、建物の中で語りあう人々や駅馬車を待つ人たち、道路を歩く人々など生き生きとした表情で再現されている。さらに別の展示ケースでは、物が散らかっている子供部屋や診療所の待合室などが再現され、いつまで見ても飽きない展示である。

この博物館は、ご主人のロイ・ウィットマン氏が長年勤めたフェリーのキャプテンをやめて、模型作りの趣味を生かし、奥さんのキャロル・ロビンソンの協力を得て、6年かかって製作したミニチュアを基礎に2001年にオープンしたものである。ミニチュア建物の屋根は、ヒマラヤスギの柿板張りで手作りされ、その総数は28,000枚にもおよぶという。また、街路に敷かれた板材は1,650枚で、人間や動物の小立像は150体にもおよぶ。まさに、ウィットマン夫妻の夢と情熱がにじみ出ている博物館ではないだろうか。



街をかけぬけるカウボーイが見えます。